

日本国民文学全集 25

大正名作集
Ⅲ

河出書房新社

日本国民文学全集 第二五卷 大正名作集(三)

昭和三十三年六月二十五日初版印刷 昭和三十三年六月三十日初版発行

著者代表 谷崎潤一郎

発行者

河出孝雄

印刷者

角能充朗

静岡県駿東郡原町大塚一五



発行所 株式会社 河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三ノ八

電話(二九)三七二番 振替東京一〇八〇二番

図書印刷株式会社印刷・小高製本

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目次

大正名作集(三)

徳田秋聲

あらくれ

一

永井荷風

腕くらべ

三

谷崎潤一郎

痴人の愛

一五

瀧井孝作

無限抱擁

三

年譜

三

解説

平野謙三

装幀 原弘

あ
ら
く
れ

徳
田
秋
聲

お島が養親の口から、近いうちに自分に入婿の来るよしをはのめかされた時に、彼女の頭脳には、まだ何等の分明した考えも起って来なかった。

十八になったお島は、その頃その界限で男嫌いという評判を立てられていた。そんなことをしずとも、町屋の娘と同じに、裁縫やお琴の稽古でもしていれば、立派に年頃の綺麗な娘で通して行かれる養家の家柄ではあったが、手頭などの器用に産れついでいない彼女は、じつと部屋のかなかに坐っているようなことは余り好まなかったので、稚いお島から善く外へ出て田畑の土を弄ったり、若い男達と一緒に、田植に出たり、稲刈に働いたりした。而してそんな荒仕事が如何かすると寧ろ彼女に適しているようにすら思われた。養蚕の季節などにも彼女は家中の誰よりも善く働いてみせた。そうして養父や養母の氣に入られるのが、何よりの楽しみであった。界限の若いものや、傭い男などから、彼女は時々揶揄われたり、猥らな真似をされたりする機会が多かった。お島はそうした男達と一緒に働

いたり、ふざけたりして嬉しくことが好きであったが、誰もまだ彼女の頬や手に触れたという者はなかった。そういう場合には、お島はいつも荒れ馬のように暴れて、小ッびどく男の手顔を引かくか、さもなくれば人前でそれを素破ぬいて辱をかけるかして、自ら悦ばなければ止まなかった。

お島は今でもその頃のことを善く覚えてゐるが、彼女がここへ貰われて来たのは、七つの年であった。お島は昔氣質の律義な父親に手をひかれて、或日の晩方、自分に深い憎しみを持っている母親の暴い怒りと惨酷な折檻から脱れるために、野原をそっち此方彷徨っていた。時は秋の末であつたらしく、近在の貧しい町の休み茶屋や、飲食店などには赤い柿の実が、枝ごと吊されてあつたりした。父親はそれらの休み茶屋へ入って、子供の疲れた足をぬわり休めさせ、自分も茶を呑んだり、菓をふかしたりしていたが、無智なお島は、茶屋の女が剥いてくれる柿や塩煎餅などを食べて、臆病らしい目でそこらを見まわしていた。今まで赤々していた夕陽がかげって、野面からは寒い風が吹き、方々の木立や、木立の蔭の人家、黄色い懸稲、黝い畑などが、一様に夕濛に裏まれて、一日苦使われて疲れた体を慵けに、往來を通過てゆく駄馬の姿などが、物悲しげにみえた。お島は大きな重い車をつけれられて、柔順に引張られてゆく動物のしよぼしよぼした目などを見ると、何とな

し涙ぐまれるようであつた。気の荒い母親があらのがれて、娘の遺場に困っている自分の父親も可哀そうであつた。

お島は爾時、ひろびろした水のほとりへ出て来たように覚えてゐる。それは尾久の渡あたりでもあつたらうか、のんびりした暗碧なその水の面にはまだ真珠色の空の光がほのかに差していて、静かに漕いでゆく淋しい舟の影が一つ二つみえた。岸には波がだぶだぶと浸って、怪獣のような暗い木の影が、そこに揺めいていた。お島の幼い心も、この静かな景色を眺めているうちに、頭のうえから爪先まで、一種の畏怖と安易とにうたれて、黙ってじつと父親の瘦せた手に縋っているのであつた。

二

その時お島の父親は、どういう心算で水のほとりへなぞ彼女をつれて行ったのか、今考えてみてもその心持は素より解らない。或は渡を向うへ渡って、そこで知合いの家を探ねてお島の体の始末をする目算であつたであらうが、お島はその場合、水を見てゐる父親の暗い顔の底に、或可恐しい惨忍な思着が潜んでいるのではないかと、ふと幼心に感づいて、怯えた。父親の顔には悔恨と懊惱の色が現われていた。

赤児のおりから里にやられていたお島は、家へ引取られてからも、氣強い母親に疎まれ

がちであつた。始終めそめそしていたお島は、どうかすると母親から、小さい手に焼火箸を押しつけられたりした。お島は涙の目で、その火箸を見詰めていながら、剛情にもその手を引込めようとはしなかった。それが一層母親の憎しみを募らせずにはおかなかつた。

「この業つく張め。」彼女はじりじりして、そう言つて罵つた。

昔は庄屋であつたお島の家は、その頃も界限の人達から尊敬されてゐた。祖父が將軍家の出遊のおりの休憩所として、広々した庭を献納したことが、家の由緒に立派な光を添えていた。その地面は今でも市民の遊園地として遺つてゐる。庭造りとして、高貴の家へ出入してゐたお島の父親は、彼が一生の瑕としてお島たちの母親である彼が二度目の妻を、賤しいところから迎えた。それは彼が、時々酒を飲みに行く、近辺の或る安料理屋にゐる女の一人であつた。彼女は家にいては能く働いたがその身状を誰も好く言うものはない。

お島が今の養家へ貰われて来たのは、渡場でその時行違つた父親の知合いの男の口入であつた。紙漉場などをもつて、細々と暮らしてゐた養家では、その頃不思議な利得があつて、遽かに身代が太り、地所などをどしどし買入れた。お島は、養親の口から、時々その折の不思議を洩れ聞いた。それは全然作り物語に

でもありそうな事件であつた。或冬の夕暮に、放浪の旅に疲れた一人の六部が、そこへ一夜の宿を乞ひ求めた。夜があけてから、思ひがけない或幸いが、この一家を見舞うであらう由を言告げて立去つた。その旅客の迹に、貴い多くの小判が、外に積んだ櫓のなかから、二三日たつて発見せられた。養父は大分たつてから、一つはその旅客の迹を追うべく、一つは諸方の神仏に、自分の幸を感謝すべく、同じ巡礼の旅に上つたが、終にそれらしい人の姿にも出逢わなかつた。左に右、養家はそれから好い事ばかりが続いた。ちよいちよい町の人達へ金を貸しつけたりして、夫婦は財産の殖えるのを楽しんだ。

「その六部が何者であつたかな。」養父は稀に門辺へ来る六部などへ、厚く報酬をするおりに、その頃の事を想ひ出して、お島に語り聞かせたが、お島はそんな事には格別の興味もなかつた。

養家へ来てからのお島は、生の親や兄弟たちと顔を合す機会は、減多になつた。

三

しかし時がたつに従つて、その時の事実の真相が少しずつお島の心に沁込むようになって来た。養家の旧を聞知つてゐる学校友達などから、ちよいちよい聞くとともに聞齟つたところによると、六部はその晩急病のためにそこで落命したのであつた。そして死んだ彼

の懷ろに、小判の入つた重い財布があつた。それをそっくり養父母は自分の有にしてしまつたというのであつた。お島はその説の方に、より多く真実らしいところがあると考へたが、矢張り好い氣持がしなかつた。

「言いたがるものには、何とでも言わしておくさ。お金ができるのと何とか彼とか言いたがるものなのだよ。」

お島がその事を、私と養母に糺したとき、彼女はそう言つて苦笑してゐたが、養父母に對する彼女の是迄の心持は、段々裏切られて来た。自分の幸福にさへ黒い汚点が出来たように思はれた。そしてそれからというもの、出来るだけ養父母の秘密と、心の傷を飾りかばうようにと力めたが、如何かすると親たちから疎まれ憚られてゐるような氣がさしてななかつた。

六部の泊つたという、仏壇のある寂しい部屋を、お島は夜更へ往來に必ず通らなければならなかつた。そこは畳の凸凹した、屋でも日の光の通わないような薄暗い八畳であつた。夫婦はそこから一段高い次の部屋に寝てゐたが、お島は大きくなつてからは大抵勝手な近しい六畳の納戸に寝かされてゐた。お島はその八畳を通る度に、そこに財布を懷ろにしたまま死んでゐる六部の蒼白い顔や姿が、まざまざ見えるような氣がして、身うちが慄然とするような事があつた。夜はいつでも宵の口から臥床に入ることにしてゐる父親の寐言

などが、ふと寢覺の耳へ入ったりすると、それが不幸な旅客の亡霊か何ぞに魔^まされて苦悶の声ではないかと疑われる。

陽気のぼかぼかする春先などでも家のなかには始終湿っぽく、陰惨な空氣が籠^{かこ}っているように思えた。そして終日庭むきの部屋で針をもっている、頭腦^{なう}がのうのうして、寿命がちぢまるような鬱陶^{ふさふさ}しさを感じた。お島は糸屑^{いとくず}を払いおとして、裏の方にある紙漉場の方へ急いで出ていった。

藪疊^{やぶふみ}を控えた広い平地にある紙漉場の藪^{やぶ}に、温かい日がさして、楮^しを浸すために盈々と湛えられた水が生暖かくぬるんでいた。そこらには桜がもう咲きかけていた。板に張られた紙が沢山日に干されてあった。この商売も、この三四年近辺に製紙工場が出来などしてからは、早晩罷^やれてしまうつもりで、養父は余り身を入れぬようになった。今は職人の数も少なかった。そして幾分不用になった空地は庭に作られて、洒落^{しや}た枝折^えなどが營^かわれ、石や庭木が多く植え込まれた。住居のほうもあちこち手入をされた。養父は二三年そんな事にかかっていたが、今は単にそればかりでなく、抵当流れになったような家屋敷も外に二三箇所はあるらしかった。けれど養父母はお島に詳しいことを話さなかった。

「貧乏くさい商売だね。」お島は自分の稚^こい時分から居ずわりになっている男に声かけた。その男は楮^しの煮らるる釜の下^{した}の火を見ながら、

「跪^{ひざま}ずんで糞^{ふん}を喫^くっていた。頸^{くび}の伸びた蒼白^{そうはく}い顔は、明るい春先になると、一層貧相らしくみえた。」

「お前さんの紙漉も久しいもんだね。」

「駄目だよ。旦那が気がないから。作^{しや}というその男は俛^ひいたまま答えた。もう楮^しのなから小判^{せうはん}の出^でて来る氣遣^{きづ}もないからね。」

「真実だ。」お島は鼻頭^{びだう}で笑った。

四

お島は幼い時分この作^{しや}という男に、よく学校の送迎^{そうおう}などをして貰^{もら}ったものだが、養父の甥^{へい}に当る彼は、長いあいだ製紙の職工として、多くの女工と共に働かされたのみならず、野良仕事や養蚕^{やうさん}にも始終苦使^{くし}われて来た。そうして氣の強い主婦^{しゆふ}からはがみがみ言われ、お島からは家か何ぞのように忌嫌^{きけん}われた。絶え間のない労働に堪えかねて、彼は如何かすると氣分がわるいといって、少し遅くまで寝ているようなことがあると、主婦のおとらは直きに氣荒^{きわ}く罵^{のの}った。

「おいおい、この忙しいのに寝ている奴があるかよ。旧^{ふる}を考えてみる。」

おとらは作の隠れて寝ている物置のような汚いその部屋を覗^{のぞ}込みながら毎時ものお定例^{じやうれい}を言^いって歎^{なげ}鳴^なった。甲走^{かそう}ったその声が、彼の脳天^{のうてん}までびんと響いた。作は主人の兄にあたるやくざ者と、どこのものともしれぬ旅芸人の女との間にできた子供であった。彼の父親

は賭博^{どぱく}や女に身上^{しんかう}を入^いりあげて、その頃から弟の厄介^{やくがい}のものであったが、或時身寄を頼^{たの}って、上州^{じやうしゅう}の方へ稼^{かせ}ぎに行^いっていたおりにその女に引^ひかれて、それから乞食^{こじき}のように零落^{ぜろらく}されて、間もなくまた二人でこの町へ復^{かへ}つて来た。その時身重であったその女が、作を産みおとしてから程なく、子供を弟の家に置去^{おき}に、どこともなく旅へ出て行^いった。男が病氣で死んだという報知^{ほうち}が、木更津^{きさらぎ}の方から来たのは、それから二三年も経^へってからであった。

お島はおとらが、その頃のことを何かのおりには作に言聞^いかせているのを善く聞いた。おとらは兄夫婦が、汽車にも得乗^えらず、夏の暑い日と、野原の荒い風に焼^やけやつれた黧^{くろ}い顔をして、疲れきった足を引きずりながら這^は込んで来た光景を、口癖^{くぐせ}のように作に語^{かた}って聞^きかせた。少しでも怠^{おろそ}けたり、ずるけたりするとそれを持出した。

「あの衆と一緒だったら、お前だって今頃は乞食^{こじき}でもしていたらうよ。それでも生みの親が恋^こしいと思うなら、いつだって行くがい。」

作は親のことを言出されると、時々ぼろぼろ涙を流^{なが}していたものだが、終にはえへへと笑^{わら}って聞^きいていた。

作はそんなに醜^{みにく}い男ではなかったが、いじけて育^{そだ}ったのと、發育盛^{はつちやう}りを劇^{げき}しい労働に苦^{くる}使^{つか}われて栄養^{えいよう}が不十分^{ふじふと}であったので、皮膚の色^{いろ}が悪^{わる}く、青春^{せいしゆん}期に達^{いた}しても、ばさばさし

たような目に潤いがなかった。主人に吩咐しんぷか
つて、雨降りに学校へ迎えに行ったり、宵に
遊びほうけて、何時までも近所に姿のみえな
いおりなどは、遠くまで捜しにいったりして、
負つたり抱いたりして来たお島の、手足や髪
の見ちがえるほど美しく肉つき伸びて行くの
が物希しくふと彼の目に映った。たつぷりし
たその髪を島田に結って、なまめかしい八つ
口から、むっちりした脇を見せながら、襷が
けで働いているお島の姿が、長いあいだ彼の
心を苦しめて来た、彼女に対する淡い嫉妬を
さえ、吸取るように拭ってしまった。それま
で彼は歴々とした生みの親のある、家の後取
娘として、何彼につけておとらから銜くはらかす
ように、隔てをおかれるお島を、詛もねわしくも
思っていた。

五

お島が作を一層嫌って、侮蔑するようにな
つたのもその頃からであった。

蒸暑い夏の或る真夜中に、お島はそこらを
開放して、蚊帳のなかで寝苦しい体を持余し
ていたことがあった。酸っぱいような蚊の唸
声なげが夢現のような彼女のいらいらしい心を責
め苛むように耳についた。その時ふとお島の
目を脅かしたのは、蚊帳のそこから覗いてい
る作の蒼白い顔であった。

「莫迦、阿母さんに言告げてやるぞ。」
お島は高い調子に叫んだ。それで作はのそ

のそと出でいったが、それまで何の気もなし
に見ていたそれと同じような作の挙動が、そ
の時お島の心に一々意味をもつて来た。お島
は劇しい侮蔑を感じた。或時は野良仕事をし
ている時につけ廻されたり、或時は湯殿にい
る自分の体に見入っている彼の姿を見つけた
りした。

お島はそれ以来、作の顔を見るのも胸が悪
かった。そして養父から、善く働く作を自分
の婿に扱ほうとしているらしい意圖を洩され
たときに、彼女は体が疎まほど厭な気がし
た。しかし養父のその考えが、段々分明して
来たとき、お島の心は、自ら生みの親の家の
方へ縋すがいていった。

「何しろ作は己の血筋のものだから、同じ継
がせるなら、彼に後を取らせた方が遙だ。」

養父は時おり妻のおとらと、その事を相談
しているらしかったが、お島はふとそれを立
聞きしたりなどすると、堪えがたい圧迫を感
じた。我儘な反抗心が心に湧返つて来た。

作の自分を見る目が、段々親しみを加えて
来た。彼は出来るだけ打積けた態度で、お島
に近づこうとした。畑で桑など摘んでいる
と、彼はどんな遠いところで、忙しい用事に
働いている時でも、彼女を見廻ることを忘れ
なかった。彼はその頃から、働くことが面白
そうであった。叔父夫婦にも従順であった。
お島は一層それが不快であった。
おとらが内々お島の婿にしようとしてい

るらしい或若い男の兄が、その頃おとらのと
ころへ入浸つていた。青柳というその男は、
その町の開業医として可也に顔が売っていた
が、或る私立学校を卒業したというその弟を
も、お島はちょいちょい見かけて知つてい
た。

気爽きさくで酒のお酌などの巧いおとらは、夫の
留守などに訪ねて来る青柳を、よく奥へ通し
て銚子のお燗をしたりしているのを、お島は
時々見かけた。一日かかって四十把の櫓を漕
くのは、普通一人前の極度の仕事であったが、
おとらは働くとなると、それを八十把も漕く
ほどの働きものであった。そして人のいい夫
を其方退けにして、傭い人を見張つたり、金
の貸出方や取立方に抜目のない頭脳かみを働かし
ていたが、青柳の顔が見えると、どんな時で
も彼女の様子がそわそわしずにはいなかっ
た。

お島の目にも、愛相あいさのいい青柳の人柄は好
ましく思えた。彼は青柳から始終お島坊お島
坊と呼びなづけられて来た。最近青柳がいつ
か養父から借りて、新座敷の造営に費った金
高は、少い額ではなかった。

六

お島は作との縁談の、まだ持ちあがらぬず
つと前から、よく養母のおとらに連れられて
青柳と一緒に、大廊さまやお稲荷さまへ出か
けたものであった。天性目性の好くないお島

は、いつの頃からこの医者に時々かかっていたか、分明覚えてもないが、そこにいたお花という青柳の姪にあたる娘とも、遊び友達であった。

おとらは時には、青柳の家で、お島と對の着物をお花に持えるために、そこへ反物屋を呼んで、柄の品評をしたりしたが、仕立あがつた着物を着せられた二人の娘は、近所の人の目には、双児としかみえなかつた。おとらは青柳と大師まいりなどするおりに、初めはお島だけしか連れていかなかつたものだが、偶にはお花をも誘い出した。

お花という連のある時はそうでもなかつたが、自分一人のおりには、お島は大人同志からは、全然除けものにされていなければならなかつた。

「じゃね、小父さんと阿母さんは、ここで一服しているからね、お前は目がわるいんだから能くお詣りをしておいで。ゆっくりでいいよ。阿母さんたちは何うせ遊びに来たんだからね。小父さんも折角来たもんだから、お酒の一口も飲まなければ満らないだろうし、阿母さんだって偶に出るんだからね。」

おとらはそう言つて、博多と琥珀の晝夜帯の間から紙入を取出すと、多分のお賽銭をお島の小さい墓口に入れてくれた。そこは大師から一里も手前にある、ある町の料理屋であつた。二人はその奥の、母屋から橋がかりになつてゐる新築の座敷の方へ落着いてから、

お島を出してやつた。

それは丁度初夏頃の陽気で、肥つたお島は長い野道を歩いて、脊筋が汗ばんでゐた。顔にも汗がにじんで、白粉の剥げかかつたのを、懷中から鏡を取出して、直したりした。山がかりになつてゐる料理屋の庭には、鶯鷓が咲亂れて、泉水に大きな緋鯉が絵に描いたように浮いてゐた。始終働きづめであるお島は、こんなところへ来て、偶に遊ぶのはそんなに悪い氣持もしなかつたが、落着かない青柳や養母の目色を候うと、何となく氣がつまつて居辛かつた。そして小さいおりから母親に媚びることを学ばされて、そんな事にのみ敏い心から、自然に故ら二人に甘えてみせたり、嫌いでみせたりした。

「ええ、可ござんすとも。」

お島は大きく頷いて、威勢よくそこを出ると、急いで大師の方へと歩き出した。

町には同じような料理屋や、休み茶屋が外にも四五軒目に着いたが、人家を離れると直きに田圃道へ出た。野や森は一面に青々して、空が美しく澄んでゐた。白い往来には、大師詣りの人達の姿が、ちらほら見えて、或る雑木林の片陰などには、汚い天刑病者が、そこにもここにも頭を土に摺りつけてゐた。それらの或者は、お島の迹から絡わり着いて来そうな調子で恵みを強請つた。お島は如何かすると、墓口を開けて、錢を投げつつ急いで通り過ぎた。

曲りくねつた野道を、人の影について辿つて行くと、やがて大師道へ出て来た。お島はぞろぞろ往来している人や俤の群に交つて歩いてゐたが、本所や浅草辺の場から出て来たらしい男女のなかには、美しく装つた令嬢や、意気な内儀さんも偶には目についた。金縁眼鏡をかけて、細巻を用意した男もあつた。独法師のお島は、草履や下駄にはねあがる砂埃のなかを、人なつかしいような可憐しい心持で、ぱつぱと蓮葉に足を運んでゐた。はてる脛に絡わる長襦袢の、ぼつとりとした膚触が、氣持が好かつた。今別れて来た養母や青柳のことは直きに忘れてゐた。

大師前には、色々の店が軒を並べていた。張子の虎や起きあがり法師を売つてゐたり、おこしやぶつ切り鈴を賣つてゐたりした。榮螺や蛤なども目についた。山門の上には馬鹿囃の音が聞えて、境内にも雑多の店が居並んでゐた。お島は久しく見たこともないような、かりん糖や太白鉛の店などを眺めながら、本堂の方へあがつて行つたが、どこもかしこも在郷くさいものばかりなのを、心寂しく思つた。お島は母に媚ぶるためにお守札や災難除のお札などを、こてこて受けることを怠らなかつた。

そこを出てから、お島は野広い境内を、其方こつち歩いてみたが、所々に海獸の見せも

敷へ入ったりして、時を消した。二人は手を引合つて人込のなかを歩いてたが、矢張り心が落着かなかつた。

おとらは時とすると、若い青柳の細君をつれだして、東京へ遊びに行くこともあつたが、内気らしい細君は、誘はるるままに素直について往つた。おとらは往返りには青柳の家へ寄つて、姉か何ぞのように挙動つていたが、細君は心の侮蔑を面にも現わさず、物静かに待遇つていた。

九

何時の頃であつたか、多分その翌年頃の夏であつたらう、その年重にお島の手に委されてあつた、僅二枚ばかりの蚕が、出来揚るに間のない或日、養父とごたごたした物言の揚句、養母は着物などを着替えて、ぶらりとどこかへ出ていってしまった。

養母はその時、青柳にその時々貸した金のことについて、養父から不足を言われたのが、氣に障つたと言つて、大声をたてて良人に喰つてかかつた。話の調子の低いのが天性である養父は、嵩にかかつて言募つて来るおとらのために遣込められて、終には有めるように辞を和げたが、矢張りいつまでもぐずぐず言つていた。

「ちつと昔しを考えて見るがいいんだ。お前さんだつて好いことばかりもしてないだらう。旧を洗つてみた日には、余り大きな顔を

して表を歩けた義理でもないじゃないか。」養蚕室にあつた例の薄暗い八畳で、給桑に働いていたお島は、甲高いその声を洩聞くと、胸がどきりとするようであつた。お島は直きに六部のことを思ひ出さずにいられなかつた。ぶすぶす言つてゐる哀れな養父の声もとぎれとぎれに聞えた。

青柳に貸した金の額は、お島にはよくは判らなかつたが、家の普請に幾分用立てた金を初めとして、ちよいちよい持つていった金は少い額ではないらしかつた。この一二年青柳の生活が、いくらか華美になつて来たのが、お島にも目についた。養父の知らないような少額の金や品物が、始終養母の手からそつと供給されてた。

お島はその年の冬の頃、一度青柳と一緒に落会つた養母のお伴をしたことがあつたが、十七になるお島を連出すことはおとらにも漸く憚られて来た。場所も以前のお茶屋ではなかつた。

その日も養父は、使い道の分明しないような金のことについて、屋頃からおとらとの間に紛紜を惹起してゐた。長いあいだ不問に附して来た、青柳への貸のことが、ふとその時彼の口から言出された。そして日頃肚に保つていた色々の場合のおとらの挙動が、ねちねちした調子で詰られるのであつた。

結局おとらは、綺麗に財産を半分わけにして、別れようと言出した。そして良人の傍を

離れると、奥の間へ入つて、暫く用簞笥の抽斗の音などをさせていたが、それきり出ていった。

「まあ阿母さん、そんなに御立腹なさらないで、後生ですから家にいて下さい。阿母さんが出ていってしまひなすたら、私なんざ如何するんでしよう」

お島はその傍へいって、目に涙をためて哀願したが、おとらは振顧きもしなかつた。

夜になつてから、お島は養父に吩咐かつて、近所をそつち方尋ねてあるいた。青柳の家へもいつて見たが、見つからなかつた。

おとらの未だ歸つて来ない、或日の午後、蚕に忙しいお島の目に、ふと庭向の新築の座敷で、おとらを生家へ出してやつた留守に、何時か為たように、夥しい紙屑を干している養父の姿を見た。八畳ばかりの風通しのいいその部屋には、紙幣の幾束が日当りへ取出されてあつた。

十

お島は養父が、二三軒の知合いの家へ葉書を出したことを知つていたが、おとらが歸つてから、やつと届いたおとらの生家の外は、その返辭はどこからも来なかつた。

養父は如何かすると、蚕室にゐるお島の傍へ来て、もうひきるばかりになつてゐる蚕を眺めなどしてゐた。蚕の或物はその蒼白い透徹するような軀を硬張せて、細い糸を吐きかけ

ていた。

「お前阿母から口止されてることがあるだらうが。」

養父はこの時に限らず、おとらのいない処で、如何かするとお島に訊ねた。

「どうしてです。いいえ。」お島は顔を赧めた。

しかし養父はそれ以上深入しようとはしなかった。お島にはおとらに対する養父の弱点が見えすいているようであった。

もう遊びあいて、家が気にかかりだしたというふうで、おとらの帰って来たのは、その日の暮近くであった。養父はまだ帳場の方を離れずにいたが、おとらは亭主にも辞もかけず、「はい只今」と、お島に声かけて、茶の間へ来て足を投げ出すと、せいせいするような目色をして、庭先を眺めていた。濃い緑の草や木の色が、まだ油絵具のように生々してみえた。

お島は脱ぎすてた晴衣や、汗ばんだ襦袢などを、風通しのいい座敷の方で、衣紋竹にかけたり、茶をいれたりした。

「こんな時に顔を出しておきましようと思つて、方々歩きまわつて来たよ。」おとらは行水をつかいながら、背を流しているお島に話しかけた。その行つた先には、種違いのおとらの妹の片着先や、子供のりの田舎の友達縁づいてる家などがあつた。それらは皆な東京のごちゃごちゃした下町の方であつた。

そして誰も好い暮しをしている者はないらしかつた。そして一日二日もいると、直きに厭気がさして来た。おとら夫婦は、金ができるにつれて、それらの人達との間に段々隔てができて、往來も絶えがちになつていた。生家とも矢張りそうであつた。

湯から上つて来ると、おとらは東京からこてこて持つて来た海苔や塩煎餅のようなものを、明の下で亭主に見せなどしていたが、飯がすむと蚊のうるさい茶の間を離れて、直きに蚊帳のなかへ入つてしまつた。

毎夜毎夜寢苦しいお島は、白い地面の瘴気の夜露に吸取られる頃まで、外へ持出した縁台に涼んでいたが、近所の娘達や若いものも、時々そこに落会つた。町の若い男女の噂が賑つたり、悪巫山戯で女を怒らせたりした。

仕舞湯をつかつた作が、浴衣を引っかけて出て来ると、うそうそ傍へ寄つて来た。

「この莫迦また出て来た。」お島は腹立しげにういといとそこを離れた。

十一

おとらと青柳との間に成立つていたお島と青柳の弟との縁談が、養父の不同意によつて、立消えになつた頃には、おとらも段々青柳から遠ざかつていた。一つはお島などの口から、自分と青柳との関係が、うすうす良人の耳に入つたことが、その様子で感づかれたのに厭気がさしたからであつたが、一つは青柳

夫婦がぐるになつて、惣一方でかかつていることが余りに見えすいて来たからであつた。

お島が十七の暮から春へかけて、作の相続問題が、また養父母のあいだに持ちあがつて来た。お島はその事で、養父母の機嫌をそこねてから、一度生みの親達の傍へ歸つていた。

お島はその頃、誰が自分の婿であるかを明白知らずにいた。そして婚礼支度の自分の衣裳などを縫いながら、時々青柳の弟のことなどを、ぼんやり考えていた。東京の学校で、機械の方をやつていたその弟と、お島はついこれまで口を利いたこともなかったし、自分を如何思っているかをも知らなかったが、深川の方に勤め口が見つかつてから、毎朝はやく、詰入の洋服を着て、鳥打をかぶつて出て行く姿をちょいちょい見かけた。途中で逢うおりなどには、双方でお辭儀ぐらいはしたが、お島自身は彼について深く考えて見たこともなかった。そして青柳とおとらとの間に、その話の出るとき毎時避けるようにしていた。

ある時そんな事については、から薄ぼんやりなお花の手を通して、綺麗な横封に入つた手紙を受取つたが、洋紙にペンで書いた細かい文字が、何を書いてあるのかお花にはよくも解らなかつたが、双方の家庭に対する不満らしいことの意味が、お島にもぼんやり頭腦に入つた。お島のそんな家庭に縛られている不幸に同情しているような心持も、微かに受

取れたが、お島は何だか厭味なような、擦っ
たいような気がして、後で揉みくしやにして
棄ててしまった。その事を、多少誇りたい心
で、おとらに話すと、おとらも笑っていた。
「あれも妙な男さ。養子なんかに行くのはい
やだといつて置きながら、そんな物をくれる
なんて。」

お島は養父母が、すっかり作に取決めてい
ることを感づいてから、仕事も手につかない
ほど不快を感じて来た。おとらには不機嫌なお
島の顔をみると、お島が七つのとき初めて、
人につれられて貰われて来た時の惨めなさま
を掘返して聞かせた。

「あの時お前の阿父さんは、お前の遺場に困
って、阿母さんへの面あてに川へでも棄てて
しまおうと思つたくらいだったという話だ
よ。あの阿母さんの手にかかつていたら、お
前は産れもつかぬ不具になつていたかも知れ
ないよ。」おとらはそう言つて、生みの親の無
情なことを語り聞かせた。

十二

近所でも知らないような、作とお島との婚
礼談が、遠方の取引先などで、意いがけなく
お島の耳へ入つたりしてから、お島は一層
分明自分の惨めな今の身のうえを見せつけら
れるような気がして、腹立しかつた。そして
その事を吹聴してあるくらしい、作の顔が一
層闇ぬけてみえ、厭らしく思えた。

「まだ帰らねえかい。」そう言つて、小さい時
分から学校へ迎えに来た作は、昔も今も同じ
ような顔をしていた。

「外に待つておいで。」お島はよく叱りつける
ように言つて、入口の外に待たしておいたも
のだが、今でも矢張、下駄に手をふれられて
も身ぶるいがするほど厭であつた。

婚礼談が出るようになってから、作は懲り
ずまに善くお島の傍へ寄つて来た。余所行の
化粧をしているとき、彼は横へ来てにこにこ
しながら、横顔を眺めていた。

「あつちへ行つておいで。」お島はのしかかる
ような指撥声を出して逐退けた。

「そんなに嫌わんでもいいよ。」作はそのそ
出ていった。

作の来るのを防ぐために、お島は夜自分の
部屋の襖に心張棒を突き立ておいたりしなけ
ればならなかつた。

「厭だ厭だ、私死んでも作なんどと一緒にな
るのは厭です。」お島は作のいる前ですら、始
終母親にそう言つて、剛情を張通して来た。

「作さんが到頭お島さんのお婿さんに決つた
そうじゃないか。」

お島は仕切を取りに行く先々で、擲捨い面
で訊かれた。足まめで、口のてきばきしたお
島は、十五六のおりから、そうした得意先ま
わりをさせられていた。お島のきびきびした
調子と、蓮葉な取引とが、到るところで評判
がよかつた。物馴れてくるに従つて、お島の

顔は一層広くなつて行つた。

それが小心な養父には、気に入らなかつた。
時々お島は養父から小言を言われた。

「いいじゃありませんか阿父さん、家の身上
をへらすような氣遣はありませんよ。」お島は
煩さそうに言つた。

「阿父さんのように各々していたんじゃ、手
広い商売は出来やしませんよ。」

ばつぱつとのお島の遣口に、不安を懷き
ながらも、氣無性な養父は、お島の働きぶり
を調法がらずにはいられた。

「嘘ですよ。」

お島は作と自分との結婚を否認した。

「それでも作さんがそう言つていましたぜ。」
取引先の或人は、そう言つて面白そうにお島
の顔を覗めた。

「あの莫迦の言うことが、信用できるもんで
すか。」お島は鼻で笑つていた。

王子の方にある生家へ逃げて帰るまでに、
お島の周囲には、その噂が到るところに拡が
つていた。

「それじゃお前は、どんな男が望みなのだ
え。」おとらは終にお島に訊ねた。

「そうですね。」お島はいつもの調子で答え
た。

「私はあんな愚図愚図した人は大嫌いです。

ちつとは何か大きい仕事でもしそうな人で綺
麗に暮していけるような人でなければ、つま
りません。一生紙をすいたり、金の利息の勘

定して暮すのは私願です。」

十三

盆か正月でなければ、減多に泊ったことのない生みの親達の家へ来て二三日たつと、直きに養母が迎いに来た。

お島が盆暮に生家を訪ねる時には、砂糖袋か鮭を提えて作が屹度お伴をするのであったが、この二三年商売のほうを助けなどするために、時には金の仕舞つてある押入や用筆笥の鍵を委されるようになってからは、不断は仲のわるい姉や、母親の感化から、これも動もすると自分に一種の慚侮を持っている妹に、半衿や下駄や、色々の物を買って行つて、お辞儀をされるのを矜りとした。姉や妹に限らず、養家へ出入する人にも、お島はばつぱと金や品物をくれてやるのが、気持が好かった。

貧しい作男の哀願に、堅く財布の口を締めている養父も、傍へお島に來られて嫁を容れられると、因業を言張つて許りもいられなかった。遊女屋から馬をひいて来る職工など、お島は自分の考えて時々金を出してくれた。それらの人は、途でお島に逢うと、心から叮嚀にお辞儀をした。

大方の屋敷まわりを兄に委せかけてあった実家の父親は、兄が放蕩を始めてから、また自分で稼業に出ることにしていたので、お島はそうして帰つて来ても減多に父親と顔を合さなかった。毎日毎日箸の上下しに出る

母親の毒々しい当こすりが、お島の頭脳をくさくささせた。

「そう毎日毎日働いてくれても、お前のものと言つては何にもありやしないよ。」

母親は、外へ出て広い庭の草を取つたり、父親が古くから持つていて手放すのを惜んでいる植木に水をくれたりして、まめに働いて

いるお島の姿をみると、家のなかから言聞かされた。広い門のうちから、垣根に囲われた山がかりの庭には、松や梅の古木の植わつた大きな鉢が、幾個となく置馴べられてあつた。庭の外には、幾十株松を育ててある土地があつたり、雑多な庭木の植木溜があつたりした。この界限に散らばっているそれらの地面が、近頃兄弟達の財産として、それぞれ分割されたということはお島も聞いていた。

いつか父親が、自分の隠居所にするつもりで、安く手に入れた材木を使って建てさせた屋敷も、それらの土地の一つのうちにあつた。「ええ。ちつとばかりの地面や木なんぞ貰つたつて、何になるもんですか。水島の物にだつて目をくれてやしませんよ。」お島は跣足で、井戸から如露に水を汲込みながら言つた。「好い氣前だ。その根性骨だから人様に憎がられるのだよ。」

「憎むのは阿母さんばかりです。私は是まで人に憎がられた覚えなんかありませんよ。」

「そうかい、そう思つていれば間違はない。」

他人のなかに揉まれて、ちつとは直つたかと思つていれば、段々不可なるばかりだ。」

「余計なお世話です。自分が育てもしない癖に。」お島は如露を提げて、さっさと奥のほうへ入つて行つた。

十四

お島はもう大瓶水をくれてしまつたのであつたが、家へ入つてからの母親との紛紜が氣煩さに、矢張大きな如露をさげて、其方こつち植木の根にそそいだり、可也の距離から来る煤煙に汚れた常磐木の枝葉を払いなどしていたが、目が時々入染んで来る涙に曇つた。

「お島さん、どうも済んませんね。」などと、仕事からかえつて来た若いものが声をかけたりした。

「私はじつとしていられない性分だからね。」とお島はくつきりと白い頬のあたりへ垂れかかつて来る髪を掻きあげながら、繁みの間から晴やかな笑顔を洩していたが、預けられてあつた里から歸つて来て、今の養家へもらわれて行くまでの短い月日のあいだに、母親から受けた折檻の苦しみ、憶起された。四つか五つの時分に、焼火箸を擦しつけられた痕は、今でも丸々した手の甲の肉のうえに痣のように残っている。父親に告口をしたのが憎らしいと言つて、口を抓られたり、妹を窘めたといつては、二三尺も積つている背戸の雪のなかへ小突出されて、息の窒るほどぎゅ

うぎゅう庄しつけられた。兄弟達に食物を頒けるとき、お島だけは傍に突立ったまま、物欲しそうに、黙つてみている様子が太々しいといつて、何もくねなかったりした。土搔や、木鉄や、鋤鋤の仕舞われてある物置にお島はいつまでも、めそめそ泣いていて、日の暮にそのまま鋤をおろされて、地轡ふんで泣立てたことも一度や二度ではなかったようである。

父親は、その度に母親をなだめて、お島を赦してくれた。

「多勢子供も有つてみたが、こんな意地張は一人もありやしない。母親はお島を捻りもつぶしたいような調子で、父親と争つた。

お島は我子ばかりを劬わつて、人の子を取つて喰つたという鬼子母神が、自分の母親のような人であつたろうと思つた。母親はお島一人を除いては、何の子供にも同じような愛執を持っていた。

日が暮れる頃にお島は物置の始末をして、やつと夕飯に入つて来たが、父親は難しい顔をして、いつか長火鉢の傍で膝に向つて、お仕着せの晩酌をはじめるところであつた。外はもう夜の色が這拡がって、近所の牧場では牛の声などがしていた。往来の方で探偵ごっこをしていた子供達も、姿をかくして、空には柔かい星の影が春めいてみえた。

「まあ一月でも二月でも家においてやるがいい。奉公に出したつて、もう一人前の女だ。」

父親はそんなことを言つて、何かぶつくさ言つてゐる母親を和めてゐるらしかったが、お島は台所で、それを聞くともなしに、耳を立てながら、自分の食器などを取出していた。

「今に見る、目の飛出るようなことをしてやるから。お島はむらむらした母への反抗心を抑えながら、平氣らしい顔をしてそこへ出て行つた。切めて自分を養家へ口入れた、西田という爺さんの行つてゐるような仕事に活動してみたいと思つた。その爺さんは、近頃陸軍へ馬糧などを納めて、めきめき家を大きくしてゐた。実直に働いて来た若いものにくれてやつた姉などを、さも幸福らしく言つてゐる母親を、お島は苦々しく思つてゐたが、それにつけても、一生作などと婚札するためには、養家の関は踏ぐまいと考へてゐた。食事をしている間も、昂奮した頭脳が、時々ぐらぐらするようであつた。

十五

或日の午後におとらが迎いに来たとき、父親も丁度家に居合せて、ここから二三町先にある持地で、三四人の若い者を指図して、可也大きな赤松を一株、或る得意先へ持運ぶべく根柢えをしてゐた。

お島はおとらを客座敷の方へ案内すると、直きに席をはずしてしまつたが、実母の吩咐で父親を呼びに行つた。お島はこうして邪怪な実母の傍へ来ていると、小さい時分から自

分を可愛がつて育ててくれた養母の方に、多くの可憐しみのあることがはつきり感ぜられて来た。養家や長い馴染のその周囲も恋しかつた。

「島ちゃん、お前さんそう幾日も幾日もこちらの御厄介になつてゐても済まないじゃないか。今日は私がつれに來ましたよ。おとらにいきなりそう言つて上り込んで來られた時、お島は反抗する張合がぬけたような氣がして、何だか涙ぐましくなつて來た。

「手前の娘がわりいから、あんな我儘を言うんだ。この先もあることだから放擲つておけと、宅ではそう言つて怒つてゐるんですけれど、私めかかり子にしようと思へばこそ、今日まで面倒を見てきたあの子ですからね。」

おとらのそう言つてゐる挨拶を茶の間で茶をいれながら、お島は聞いていたが、お島のことという、誰に向つてもひり出すように言いたい実母も、ただ簡短な応答をしているだけであつた。

こんな出入に口不調法な父親は、さも困つたような顔をしてゐたが、やがて井戸の方へまわつて手顔を洗つと、内へ入つて來た。お島は母親のいないところで、ついこの一兩日前にも、父親が事によつたら、母親に秘密で自分に頒けてもいいと言つた地面の坪数や価格などについて、父親に色々聞かされたこともあつた。その坪は一千弱で、安く見積つても木ぐるみ一万円が一円でも切れるという